



令和7年度 日南市立細田小学校 自己評価書



学校の教育目標 自ら学び、進んで実践する児童の育成 きらきら輝く睡・ここに笑顔・ぐんぐん挑戦 ～小さな学校の児童に、大きな力を～

目指す児童の姿 ■主体的・対話的に深く学ぶ子 ■書く力・読む力を高める子 ■健康・食に対する意識の高い子	目指す学校の姿 ■子どもの力を伸ばす学校 ■小規模校の利を生かす学校 ■働き方を変えていく学校	目指す教師の姿 ■主体的・対話的で深い学びの視点で授業改善する教師 ■書く力・読む力を高め、読書活動を推進する教師 ■健康・食に対する意識を高める授業・手立てを工夫する教師
--	---	--

学校経営ビジョン
 子どもの力を伸ばし、小規模校の利を生かし、働き方を変えていく学校を目指し、ポジティブフィードバックを合言葉に「笑顔」を絶やさぬ学校づくり、学校の生産性向上に努める。

重点目標 ■子どもの力を伸ばす ■小規模校の利を生かす ■働き方を変えていく ■笑顔を絶やさぬ学校

重点目標	No	評価の内容	児童	保護者	教職員	平均	総合
子どもの力を伸ばす	(1)	子どもが「主体的・対話的に学ぶ授業」や、「深い学びのある授業」となるように、授業の工夫や改善をしていると思いますか？ (※問いや導入の工夫をし、子どもが進んで学んでいるか？友達や先生との話し合いなどコミュニケーションの場を設けながら学ばせているか？表面的な知識・技能習得だけでなくより深く考える学びを取り入れているか？)	3.6	3.0	3.2	3.3	3.4
	(2)	子どもの「書く力」や「読む力」を高めるために、具体的な手立てを工夫していると思いますか？ (※ノートで、ワークシートで、タブレットで、作文で、手紙で、カードで、ポスターで、など「書く力」をつける具体的な手立てを取ったか？物語文や説明文読み取り学習の工夫、漢字・語句の学習の工夫、音読など読ませ方の工夫、思考ツールの活用など、読解力を高める手立てを取ったか？)	3.5	3.2	3.2	3.3	
	(3)	「読書活動」を推進するために、具体的な手立てを工夫していると思いますか？ (※委員会活動や集会活動、読書週間・月間、たいよう号利用、GAYAの読み聞かせ、「家読」実施など、読書活動推進の具体的な手立てを取ったか？)	3.6	3.4	3.8	3.6	
	(4)	「健康や食に対する意識の高い子」を育成するために、授業の工夫・改善や具体的な手立てを工夫していると思いますか？ (※体育・保健や学級活動の授業、食育関連行事や給食指導、保健・安全指導や保健便り・食育便り等の発行、定期健診後の周知・受診勧告など、「健康や食」に関する具体的な工夫・改善、手立てを取ったか？)	3.6	3.0	3.5	3.4	

考察及び改善策

○授業の工夫改善については、教職員や児童は9割以上が肯定的な回答であるが、保護者は7割程度であった。
 →今後も話し合いの手立てを講じたりICTの活用を図ったりすることで、「主体的・対話的で深い学び」の授業を目指していく。学級通信などで授業の様子や取組について発信し、保護者に授業の様子を知ってもらう必要がある。
 ○「書く力」「読む力」を高めるための手立てについては、教職員8割、保護者9割、児童9割を越えて肯定的な回答があるが、教職員の中には否定的な回答があり、保護者も「1:とてもそう思う」の回答は2割を切っている。
 →アンケートでは「～様々な手立てが見えるか？」と聞いており、学習の方法や軌跡が見える形で保護者に示す手立てを取ることが必要である。
 ○「読書活動」の推進については、主題研究でも取り組んでおり、他の取組と比較して肯定的な回答の割合が高い。
 ○「健康や食に対する意識の高い子」の育成については、教職員・児童は9割以上肯定的な回答であるが、保護者の中には否定的な意見があり、「1:とてもそう思う」を選択している回答が2割を切っている。
 →4月参観日では養護教諭が全ての学級で歯科検診の結果について知らせ、今後の受診の勧めを行った。また、定期的に保健便りや食育便りなどを発行したり、委員会の児童と手洗いや歯みがきについての取組を実施したりしている。授業においても、担任・養護教諭・学校栄養職員が連携し、定期的に健康や食に関する学習を行っている。個別指導の必要な児童に対しても、アプローチを継続してきた。学校としては十分な取組を行っていると感じているが保護者との認識に差が見られる。学校の取組が十分に保護者へ伝わるよう、今後はマチコミメールを利用して通信等を配付するなど保護者が情報を得やすい発信の工夫が必要である。

学校運営協議会委員の意見

- ・授業や食育活動において、様々な工夫が見られる。
- ・保護者の中には否定的な意見もあるが、子どもの評価や反応を大切にしていよと考える。
- ・読解力向上の手立てとして、家庭での音読を繰り返すことが内容理解につながる可能性がある。
- ・今後も、学校通信や参観日を通して授業の様子を保護者に伝えていくことが重要である。
- ・タブレットを持ち帰り、発表や合同学習など授業の様子を保護者に見せる取組も検討してはどうか。
- ・読書活動は、紙の本だけでなくタブレットも活用しており、よい取組である。
- ・学校からの連絡をマチコミメールのみにすると、忙しい保護者がゆっくり確認できない可能性がある。
- ・子どもの力を伸ばすことが重要であり、「得意分野はさらに伸ばす」「苦手分野はつまづきを解消できる支援体制を整える」ことが望まれる。
- ・将来に向けて、AIの必要性を理解し、教育の質を高めるツールとして導入・活用を積極的に進める必要性を感じる。

重点目標	No	評価の内容	児童	保護者	教職員	平均	総合
2 小規模校の利を生かす	(1)	「細田小ふるさと学習」などの学習で地域との交流を図り、「地域とともにある学校づくり」を推進しているか？ (※生活科や総合的な学習の時間、その他の教科等で、「ふるさとの人・もの・こと」を活用した授業を展開し、体験的な学習活動を通して子ども達が地域との交流を図れているか？)	3.8	3.5	4.0	3.8	3.4
	(2)	全校や複数の学年での合同体育、合同音楽、その他教科等での合同学習、一部教科担任制などの工夫をしているか？ (※全校体育、全校音楽、その他の教科等や行事・校外学習などでの合同学習、中・高学年の理科専科や算数の学年別指導など、協働的な学びや多様な学びの機会を提供できているか？)	3.6	3.3	3.4	3.4	
	(3)	委員会活動を見直し、工夫・改善を図っているか？ (※1年間同じ委員会に所属して活動することを止め、1年間でローテーションしながら全ての委員会活動を分担して経験できる仕組みに変更したことで、子どもの自主的・自発的能力の育成を図れているか？)	3.6	3.1	3.1	3.3	
	(4)	校務分掌組織を見直し、工夫・改善を図っているか？			3.1	3.1	

考察及び改善策

- 「細田小ふるさと学習」については、肯定的な回答の割合が最も高く学校の取組や児童の学習の様子が周知され、昨年度の最も大きな課題であった「地域と共にある学校づくり」の推進が図れた。
- 「協働的な学びや多様な学びの機会の提供」については、教職員 8 割、保護者 9 割、児童 10 割が肯定的な回答である。しかし、教職員の中には否定的な回答が見られ、保護者は「1：とてもそう思う」が 3 割を切っている。
→どのような学びが「協働的な学びや多様な学び」であるのか、教職員・保護者が共通した認識をもてるような説明が必要である。
- 「委員会活動の見直し、工夫・改善」については、児童の自主的・自発的活動について全体的に 9 割以上が肯定的な回答である。しかし、教職員の中にも一部否定的な回答があり、保護者は「1：とてもそう思う」の回答が 1 割であり、全体的に良好とは言えない。
→少ない人数であっても自分の仕事に責任をもって活動する児童が多く、委員会活動の役割を分担し工夫できていることは肯定できるが、児童の自主的・自発的活動へとまだまだつながっていない面もある。次年度は、より児童の負担が少なく、自主的・自発的活動につながる取り組み方について協議を行っていく必要がある。
- 「校務分掌の見直し、工夫・改善」については、教職員の 8 割が肯定的な回答であるが、1 割は「3：あまりそう思わない」と回答しており、更なる工夫・改善の余地がある。
→各部で協力して校務を遂行できたが、時期によっては校務の負担が大きくなることもある。1・2 学期の校務部反省の成果と課題を基に校内で協議し、教職員の意見を取り入れていく。主務者である校務部や担当者は、他の教職員に役割分担をうまく振り分けていくことも必要である。

学校運営協議会委員の意見

- 細田小学校のふるさと学習
 - ・子ども達が地元を知るよい機会となっている。
 - ・地域の方々に学校を身近に感じてもらい、関心を高める取組となっている。
 - 無理のない形で継続していくことが望ましい。
- 専科指導や学年別指導があること
 - ・子ども達に適度な緊張感が生まれ、学習意欲の向上につながると考えられる。
 - 来年度は児童数の減少が見込まれるため、「地域との連携」「全校での活動」「複数学年での学習」などがさらに重要になる。
- 少人数であっても、工夫しながら役割分担を行う体制を継続していく必要がある。
- 地域に根ざした豊かな教育環境を提供できる強み
 - ・この利点を生かし、学校の魅力をさらに高めていくことに期待したい。

重点目標	No	評価の内容	児童	保護者	教職員	平均	総合
3 働き方を変えていく	(1)	学校の業務を整理してシンプル化・効率化・DX化を推進することで働き方改革を進め、学校教育の質の向上に努めているか？ (※ペーパーレス化、デジタル化、会議等の精選などを進め教職員の労働時間の削減に努めるとともに、子ども達の教育の充実に努めているか？)	3.6	3.1	3.5	3.4	3.1
	(2)	OODAループ（観察→状況判断→意思決定→行動）のステップを高速で回すことで、変化に柔軟かつ迅速に対応する意思決定のフレームワークで、年度の途中であっても改善できること、チャレンジできることに取り組む、前向きな学校組織であったか？		3.1	3.2	3.2	
	(3)	しなくてもよい仕事を洗い出し休憩時間を取得しやすくなるアイデアを出すことができたか？			2.7	2.7	

考察及び改善策

- 「シンプル化・効率化・DX化の推進で、学校教育の質の向上」については、全体的に肯定的な回答の割合が高い。一方で、保護者の「1：とてもそう思う」の回答は2割を切っており、保護者の1割、児童1人に「3：あまりそう思わない」の回答があった。
 - 「学校の働き方改革が学校教育の質の向上につながっているか」を保護者が判断することは難しかったのではないかと考えられる。また、学校業務のシンプル化はあくまで教職員側の問題と捉え、保護者にとって理解が得られなかった可能性もある。保護者にも肯定的に捉えられ、目に見える形で児童に還元できる取組を検討していく必要がある。
 - 「学校では、タブレットなどを使って勉強しやすくなっていると思いますか？」に対し、「3：あまり思わない」と回答した児童が1人いた。少数意見ではあるが児童の思いに寄り添い、タブレットを活用する授業が児童にとってよりよい学び・より楽しい学びとなるよう、常にアップデートしていく必要がある。
- 「OODAループで前向きな学校組織であったか」については、教職員9割、保護者8割が肯定的な回答であった。しかし、どちらも「1：とてもそう思う」の回答割合が低かった。
 - 「OODAループを生かして学校組織を運営している」という意味が分かりにくいことも考えられるため、次年度は的確な結果が得られるよう、より具体的な場面を示して学校の取組を周知していく。
- 「しなくてもよい仕事を洗い出し休憩時間を取得しやすくなるアイデアを出す」については、教職員の肯定的・否定的回答の割合が半々であった。
 - アイデアを出すために振り返る時間の設定ができていなかった。学期反省の項目に、働き方改革を見直す時間設定ができるとよい。

学校運営協議会委員の意見

- ・教職員の働き方について保護者の理解を得ることは難しく、どこまで歩み寄れるかが課題。
- ・教職員の休憩時間の取り方など、実態にも関心がある。
- ・働き方改革の中で、無駄な業務を減らすことが求められている。
- ・簡素化は重要だが、教職員・児童・保護者の負担にならないよう配慮が必要。
- ・教職員の日々の子どもたちの育成への努力に敬意を表する。
- ・教育現場の多忙化は深刻で、教職員の健康や教育の質、教職の魅力にも影響する可能性がある。
- ・学校運営協議会として、教職員が心身ともに健康に子どもと向き合えるよう、働き方改革の重要性を認識し提言と支援を行う。

重点目標	No	評価の内容	児童	保護者	教職員	平均	総合
や4 さ笑め顔学校を校絶	(1)	子どもの言動に対し、教職員がポジティブなフィードバックで対応し、「笑顔」を絶やさぬ学校づくりに努めていたか？	3.6	2.8	3.2	3.2	3.2

考察及び改善策

- 保護者の意見を見ると、アンケートで否定的に回答した部分についての記述をしてきているように見える。
 - 「わくわく金曜日」の在り方と目的を、改めて保護者へ分かりやすく説明していく必要がある。 →児童を指導した後は、必ずその保護者に報告を行い、相互に誤解がないように1日を終えることができるようにしていきたい。
- また、学校外でのトラブルが学校生活に大きく影響することもあるため、地域との連携を強化していくとともに、保護者への説明を誤解が無いよう丁寧に行っていく必要がある。 →児童に求めることは、教職員にも求められているという認識を教職員はもつことが大切である。(時間を守る、期日を守る、忘れ物をしない、丁寧な言葉遣い、丁寧な物の取り扱い、整理整頓など...)

学校運営協議会委員の意見

- ・「わくわく金曜日」の目的や現状が十分に分からない。
- ・子どもの満足度は高く、よい取組である可能性がある。
- ・保護者と子どもの評価の差は、親子間のコミュニケーションの影響も考えられる。
- ・第三者からは利点が見えにくい面もある。
- ・教職員の働き方や保護者の負担も含め、アンケートや協議で在り方を再検討することが望ましい。
- ・子どもへのポジティブなフィードバックの積み重ねが笑顔につながる。
- ・教職員が子どもの可能性を信じ、実践を継続・発展させていくことを期待する。